

用作品展覧會ト稱シ大正二年十月ニ其ノ第一回ヲ開キタルトキ  
審査委員ヲ囑託サレ大正七年ニ工藝展覧會ト改稱シ大正八年ニ  
又工藝審査會ト改稱サレ其委員ハ内閣ヨリ被仰付コト、為レ  
リ而シテ大正二年以來昭和六年ニ至ルマデ毎年其審査員ヲ被  
仰付是亦盡力スル所ノ功績多大ナリ

各種委員、評議員、顧問等関係事績

一、明治卅五年一月廿七日文部省ヨリ普通教育ニ於ケル圖書取調  
委員長ヲ命セラル

一、同卅六年七月廿二日文部省ヨリ圖書教科書編纂委員長ヲ囑託  
セラル

一、同四十年十月廿六日東京市長ヨリ東京市立日比谷圖書館評議  
員ヲ囑託セラル

一、同四十三年五月廿七日内閣ヨリ議院建築準備委員會委員ヲ被  
仰付

一、同四十四年五月十七日文部省ヨリ通俗教育調査委員會委員ヲ  
被仰付

一、大正七年七月十八日内閣ヨリ臨時議院建築局顧問ヲ被仰付

一、同十三年十二月廿三日農商務省ヨリ萬國裝飾美術工藝博覽會  
出品鑑査員ヲ囑託セラル

一、同十四年六月一日内閣ヨリ營繕管財局顧問ヲ被仰付

一、昭和二年九月十五日内務省ヨリ明治神宮外苑管理評議委員ヲ  
囑託セラル

一、同三年十月十三日内閣ヨリ對支文化事業調査會委員ヲ被仰付  
一、同四年四月十日宮内省ヨリ臨時正倉院寶庫調査委員會委員ヲ

命セラル

一、同五年七月三日内閣ヨリ國際觀光委員會委員ヲ被仰付  
一、同六年十月一日内閣ヨリ國立公園委員會委員ヲ被仰付

官等及位勳〔省略〕

かくて正木校長時代は終り、東京美術学校は新たな時代を迎え  
た。この変革期に際して幹事の職が復活し、四月十三日に矢代幸雄  
がこれに任命されて赤間信義を補佐した。ただし、六月十一日の教  
務分掌規定改正により幹事の職は解消された。

#### ④ 後任校長問題

「諸新聞切抜」を見ると正木直彦校長退官前後の昭和七年三〜五  
月に後任校長の人選をめぐる種々の動きがあったことが判る。校  
内から選ぶ場合は和田英作が最も有力であるという記事（三月二十  
五日『中央新聞』）、文部省が「直轄學校長中切つてのやり手」であ  
る東京音楽學校校長乗杉嘉寿に白羽の矢を立て、極力交渉中であると  
いう記事（同月二十七日『読売新聞』）、文部省宗教局長が候補に挙  
げられたが本校内に反対運動が起こったため辞退したという記事  
（四月一日『時事新報』）、校内から候補を挙げることに成り、和田  
英作、津田信夫、結城素明が挙げられたが、和田が結城が推される  
可能性が強いという記事（五月二十四日『国民新聞』）などが出て  
いる。正木の『十三松堂日記』によってもその間の動きが推察され  
るが、正木自身は和田英作を推す考えだったらしい。五月十九日の  
日記には次のように記されている。

晴 出勤 午前十時和田英作氏來訪 校長問題に就き校内にては和田氏を推すことに異存はなき様子なるに付き和田氏の肚裏如何と尋ねしに推舉を蒙るならば美術家としては大犠牲なるべきも就職する考なりと答ふ 仍て本日午後早々文部省に赤間〔信義〕局長を訪ひ美術學校長後任には和田英作氏可然旨を余の意見として内申しおきたり

正木が和田を推したのは、和田という人物に信頼を置き、その手腕に期待をかけていたことと、もう一つ、左記のような理由があった。

私の在職中に色々念としてゐた事柄は、此の美術學校は歴史のある古い學校でありますから、何でも卒業生でやつて行けるやうに、それで卒業生の發達に骨を折つて見たいと考へて、機會のある毎に此のことを力めてゐました。今度和田先生が學校長になられたと云ふことは、最早學校のことは學校出身の者でやつて行くことが出来る、世の中の美術のことも大體學校の卒業生でやつて行ける、と云ふ實例を示したものであります。

〔正木前校長の生徒一同に対する挨拶の辞〕『東京美術學校校友  
会月報』第三十一卷第三号〕

正木の内申は直ちに文部大臣鳩山一郎に承認され、和田英作が校長に任命された。

### ⑤ 和田英作の校長就任・大観の攻撃

昭和七年五月三十日、西洋画科教授和田英作が校長に就任し、赤間信義は校長事務取扱の職を解かれた。和田の経歴については既に本書第一卷330頁や第二卷63頁その他に記されているが、なお補足すれば、和田は明治三十六年教授就任以後、西洋画科の実技指導の外に、几帳面な性格と事務的才能を發揮して同科の運営につとめ、よく黒田清輝を補佐した。また、同四十年文展開設以来継続して審査委員をつとめ、大正八年帝国美術院会員となり、その間政府の各種博覧会、展覧会の審査や出品事務に携わった。その経歴は、「和田さんは岡田三郎助さんとともに、明治大正洋画界の最高峰黒田清輝さんの双翼として坦々たる出世街道をたどった人である。美術學校卒業後助教、外遊、ついで教授、文、帝展審査員、芸術院会員、帝室技芸員、文化勲章、同功労賞といった工合に美術家としての名譽の一切を授つた幸運な人である。」（坂崎坦「和田さんの芸術」『和田英作遺作展』昭和三十六年、朝日新聞社）と評される。画家としては白馬会展、文展、帝展、光風会展等に主に写実主義的作風の風景画、肖像画、花卉を出品した外、壁画の制作にも意欲を示した。

ところで、和田の校長就任は、それが本校設置以来初めての作家校長であり、しかも和田が洋画家であったことから、派閥抗争の渦巻く美術界に新たな騒動を呼び起こすことが懸念された。そのためか、各新聞がこの記事を大きく掲げており、その一つ、六月十四日の『読売新聞』は次のように報じている。

彩管を投げ捨て